

## 助成研究題目：男性同性愛者の二者関係におけるイニシアチブと拒否についてのインタビュー調査

### 調査目的：

本調査は、男性同性愛者の二者関係におけるイニシアチブと拒否について調査をした。異性間の二者関係では、しばしば男性がイニシアチブを取っている姿が見られる。そのイニシアチブを、女性が受け入れるのか、拒否をするのかという関係が多い。これに対して、男性同性愛者の二者関係は、男性同士である。男女間の伝統的な地位格差がないので、はたして、平等な二者関係なのだろうか。例えば、ある男性同性愛者の二者関係では、性的関係や性的行為において、能動的に性行為を行うほうを好みとする「タチ」、受動的に行うほうを好みとする「ネコ」(矢島 1997) という2つの好みがある。この、リードする側の「タチ」とリードされる側の「ネコ」は、彼らにとって、日常生活におけるセルフアイデンティティとして、意識されているものなのだろうか。そして、「タチ」である男性同性愛者が、「ネコ」である男性同性愛者に対して、イニシアチブを取っているのだろうか。まず、男性同性愛者の多様な二者関係を明らかにし、その上で、日常生活において、デートをしたり、遊んだり、食事をしたり、一緒に時間を過ごしている時に、男性同性愛者の人々によってどのようにイニシアチブが行使されて、それに対して、どのように受け入れたり、拒否をしたりするのかを明らかにした。これにより、男女間の二者関係の理解にもつながる、イニシアチブの一般則の一端が明らかになることが期待される。

### 調査方法：

調査協力者は、新宿二丁目の HIV/AIDS の啓発拠点、コミュニティセンターakta<sup>1</sup>が毎週行っている、バー等商業施設にコンドームやセクシャルヘルスのアイデアを配るボランティア活動に参加している男性同性愛者の人々であり、2人の男性同性愛者の人々にインタビュー調査を行った。彼らは、セクシャルヘルスに対する意識が高い人々であり、セクシャルヘルスの知識を積極的に得ようとしている人々であると言える。インタビュー時間は、1人1時間ほどで、調査協力者の年代は、20代前半である。

質問内容は、日常生活において、デートをしたり、遊んだり、食事をしたり、一緒に時間を過ごしている時に、男性同性愛者の人々の間にどのような二者関係があるのかということ、「あなたは、タチですか、またはネコですか」「どのような時に、相手に対してイニシアチブを取りますか」「相手にイニシアチブを取られた時に、あなたはどのように受け入れたり、もしくは拒否をしたりしますか」などの質問をした。

### 調査結果：

男性同性愛者の多様な二者関係が明らかになった。まず、男性同性愛者の人々と交際相手との二者関係が明らかになった。調査協力者の1人は、特定の男性同性愛者の交際相手と恋愛関係であるそうだが、他の男性同性愛者と性行為をしているそう。2人目は、特定の男性同性愛者の交際相手はいないが、男性同性愛者との性行為の経験はあるそう。この2人の事例から、恋愛関係であることと、性行為をするということが、必ずしも、ひとまとまりのことではないということがわかった。

<sup>1</sup> コミュニティセンターakta:厚生労働省が2003年から設置している HIV/AIDS の予防啓発普及拠点

次に、彼らと男性同性愛者の友達との二者関係が明らかになった。男性同性愛者の友達は、性行為の相手にもなる場合も、ならない場合もあり、また、友達から交際相手になりうる場合もあるそうだ。調査協力者の1人は、男性同性愛者の友達について、「ゲイとか関係なく気さくに」話せる関係で、男性同性愛者ではない「ノンケ」の友達との違いは、自分自身のセクシュアリティを含めて「自分をさらけ出せる」とのことだ。インタビュー調査とフィールドワークを通じてわかったことは、「新宿二丁目」というゲイタウンに来て、初めて自分自身が男性同性愛者としてカミングアウトして、他の男性同性愛者と会うということもあるということだ。そして、それは、交際相手や性行為をする人を探しに、ゲイタウンに来ること以外に、「自分をさらけ出せる」男性同性愛者の友達をつくるのが、彼らにとって、一つ目的になっていることがわかった。

今回の2人のインタビューでは、「タチ」と「ネコ」の二者関係が、性行為の場面以外の、日常生活全般における性役割(矢島 1997)としては、はっきりせず、基本的には、性行為における二者関係であった。また、タチとネコという好みと、イニシアチブを行使することの関連は、はっきりしなかった。

まず、調査協力者の1人は、比較的タチが「いいのかな」と思うそうだが「特にこだわりはない」「その日の気分」だそうだ。2人目は、タチとネコを「両方やりたい」「リバ(リバーシブル)」であるが、「実質はネコ」だそうだ。この2人の事例から、タチとネコは、自分の気分や相手によって変化するような、固定された好みではないことがわかった。

次に、性行為以外の日常生活におけるタチとネコについて、調査協力者の1人は、性行為の場面では、タチがいいけれども、日常生活では、自分は「優柔不断」なので、相手には「率先」して行動してくれるような「ひっぱってくれる人」がいいそうだ。2人目は、ネコのようにふるまうことが「あるとするれば」、ネコは「M(マゾヒズム)」であるから、日常生活で、嫌なことがあった時に、「自分はMだから、耐えられる」「つらい時も気合いでのり切る」そうだ。しかしながら、性行為における好みと、日常生活におけるセルフアイデンティティでもあるかは、今回ははっきりしなかった。

最後に、日常生活において、「能動的」なタチが、「受動的」なネコに対して、イニシアチブを取っているのだろうかについては、おおかたタチである調査協力者の1人は、友達同士であれば、相手に対して「甘える」ことはないそうだが、「先輩」や「年上」に対しては「女性っぽく」ふるまうことがあるそうだ。男性同性愛者の特有の要因ではなく、年配者であるからという外在的な要因であった。

私の調査に奨学金を給付してくださった、川上宏先生とご家族の皆様に、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

川上宏先生の奨学金10万円は、調査協力者への謝礼としての菓子代、インタビュー中の飲み物代、パソコンの購入代として、使用させていただきました。インタビュー中の飲み物は、調査協力者の方に、少しでも、リラックスして、お話していただくことができました。また、謝礼のお菓子は、喜んでいただきました。今まで使用していたパソコンは、高校時代から9年間、愛用していたのですが、どうしても動きが遅く、不便でした。奨学金で新しいパソコンを購入させていただき、調査では、例えば、インタビューの音声を文字に起こす作業をしたのですが、快適に作業することができ、とてもありがたいです。

今後も、このインタビュー調査を続けていきます。そして、これからも、男性同性愛者の人々の研究をしていきたいと思っております。ありがとうございました。